
孤独症候群

くりゆー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独症候群

【Nコード】

N2675Z

【作者名】

くりゆー

【あらすじ】

『普通』なようで、普通に『普通』じゃないとある高校2年生

山田太郎は

普通じゃない妹と

普通じゃない弟によって

普通じゃない事件に巻き込まれてゆく。

1章・普通症候群1（前書き）

初めて、小説というものを書きます。くりゅーです。

元々小説を余り読まない…というか全く読まないのですが、小説家である伯父に感銘を受けて書きはじめました。

文章も稚拙な部分が多く見られるでしょうが

最後まで誰か一人でも見ていてくれたら嬉しいです。

1章・普通症候群1

僕は今とっても憂鬱だ。

とある高校の2学年教室の一室の一番廊下側の最前列の席。

『自分』って物に嫌気がさしてくると

《並山大学 合格判定D》

とかかれた模試の結果通知を見ながら、そう感じていた。

目指す大学が難しいと言えは難しいのだが、合格判定Dという残酷な判決は、メランコリイになるには十分な材料だろう。

だが、僕にはもう一つ。ショックな知らせがその通知にはかかれていた。

「おーい！お前、今回もやりやがったか??」

僕の気分などお構いなしに、コイツは喋りかけてくる。

名前は瀧澤太陽。

身長は僕より10センチ弱大きく、俗に言う『細マッチョ』。髪の毛は少し長く、学校の生活指導の基準ストレスだ。そして顔は、恐らく僕よりもイケメンだ。

「お前……ロクな結果じゃなかっただろっに……。よく元気でいら

れるな」

瀧澤は文字通り太陽のような奴で、クラス一のひょうきんものだ。声はデカイし、下ネタはスゴイし、いらないうところで頭が高速回転するバカだ。

また空気が読めないという欠点も兼ね備える彼はまさしく『残念なイケメン』だ。

「ハッ、俺は勉強はできないけどよ。こっちはほうは天才だからよ！ 気にしねえのさ！ 点数なんかよ」と力瘤を見せつけて自慢気に話すが

それは聞き直るようにはしか聞こえない。

だがコイツの運動能力は言う通りすさまじい。

つまり彼は

《特出した才能が一個でもあれば、それでいい》
そう言いたいんだろう。悔しいが確かにそうだ。

しかし僕にはそれが無い

「で??? どうなんだよ... グラフのほうは?」

一瞬、コイツの馬鹿さ加減に気をとられた隙に太陽に見られてしまった

「おほほww! ! すごい！ お前すごいよww」

見られてしまったのは

右下の得点推移の折れ線グラフだ。

通常これには三つのグラフがかかっている。

一つ目はここ普原西高校の第2学年全体の平均値の推移。

二つ目は全国の平均値の推移。

三つ目は受験者自身の得点の推移。

僕には三つ目のグラフがかかれていない。

ちがう。

二つ目のグラフと三つ目のグラフがピッタリとドッキングしているのだ。

つまり……

「コイツまた平均値だぞ？すつげえな！！」

つまりそついうことだ。

「うっせえ！！騒ぎ立てんなよっ」

そんな言葉虚しく、周りに人が寄り付いてくる。

休み時間のためたくさんの人にかこまれる羽目になった。

「すごいじゃん！！すごいよ太郎。なかなかないよこんなこと！！」

聞いてしまったでしょうか。

寄ってくる男子どもに紛れ、一人の女子が スーパーヒーローを見
るようなテンションで語った中に、

『太郎』という単語が聞こえてしまっただろうか。

それは僕の名前だ

《名前：山田太郎 ヤマタ タロウ》

と丁寧にもフリガナまで、僕の模試の結果通知にもかいてある。

「体力測定も、身長も、座高も、体重も、学力もみんな全国平均値
なんてすっごいよ！テレビでれるよww」

この女の子

ブロンドのロング髪を携えたこの

小鳥遊 遊 という僕の幼なじみは、僕の心のデリケートな部分に
ズカズカと土足でお邪魔してくれた。

トドメに

「日本一『普通』って言葉が似合う学生だよね！太郎って」
と言い放つ小鳥遊 遊。

「うるせー！太陽だの小鳥遊だの…、お前らには『山田太郎』の気
持ちがわかるかよオオ」

机に突っ伏し、これ以上のメンタルへのダメージを防ぐ態勢に入った

「あはは…弄りすぎた…かな??」

「おいおい…顔上げろって」
小鳥遊も太陽も優しい言葉をかけてくれるが、
もはやそれすらも煩わしい

そんなことをやってる内に5限目のチャイムがなった。

僕が憂鬱な理由。

それは合格判定がDだったこと

それにプラスして

全国平均値とまるかぶりだったこと

つまり

『普通』であることだ。

まあ

今に始まったことではないのだが…

人生最大のコンプレックスであり
人生最大の悩みだった。

悩みなら同レベルの悩みがまだあるなあ……。

そんなことを思いながら、
必死にデリケートなハートを修復し5限目は終わった。

そうだ。今日は5限で終わりだった。

1章・普通症候群2

僕はマンション暮しだ。学校に徒歩で通学できるほど近くにあるマンションだ。

僕はいつもの『普通』の通学路を下校していた。

いや。僕らは…が正しいな。

「ねえねえ！この前貸したラノベ読み終わった？」

ブロンドのロング髪を携えた彼女は

小鳥遊 遊。

身長は僕より5センチほど小さいが、胸は……まあ、その…そこそこあった。

「読み終わらないよ…だって借りたの昨日の夜だぞ？」

彼女と下校するのは付き合ってるからとかじゃない。

彼女も僕の住むマンションに住んでいるのだ。

「そうだったけ？…じゃあ…どこまで読んだ!？」

大きなかわいらしい目をこちらに向けながら、覗き込むような姿勢で見つめてきた。

「まだ読んでないよ。今日、早帰りだし読むよ」

「はやく読んでよ〜」

やたらとくつついてくる彼女は、僕を男として意識してないのだから。

幼なじみが言うのも…アレだが…。

遊は学年でもかなり可愛いほうの女子だ。ブロンドのロングというところもポイントは高い。

しかし、どちらかと言えば女子と話すのが苦手な僕も、彼女とは普通に喋れる。

これは幼なじみ故の慣れと彼女の親しみ易い性格のおかげだろう。

時々、女性として意識してしまうが。

僕にとっては良い友達だ。

「ラノベの推理モノだからって嘗めないでよ！すごい仕掛けがあるって…」

熱弁する遊は、僕が殆ど聞いてないこともわかってない。

「あ！それ知ってる！それ1巻？あれでしょ、あの居酒屋のおっちゃんか犯人だったっていう奴でしょ！！？」

彼女の隣にいた瀧澤はここぞとばかりに、空気を読まずに、会話に入ってきた

「ネタバレしてんじゃ……ないわよッ！！」

遊の綺麗な足から、すさまじい威力の蹴りが繰り出された。

「あべしっ……!!」

太股を抱え悶絶している瀧澤

「お前ホント…残念なイケメンだよな」

マンションにたどり着くと、遊とふたりきりになっていた。

いつものことだ。

小、中、高校といつも繰り返していたことだけあって、何も感じない。

瀧澤とはマンションに着く少し前に別れた。これもまたいつものことだ。

ふたりきりでマンションに入り、エレベーターに乗り、降りる。

僕と遊は8階の住人なので、そこで降りる。

僕は自分の部屋の鍵を開けると、

隣の部屋の住人の遊は先に鍵を開けたらしい

「じゃあ、ご飯になったら呼びに行くから。お母さんとききてね」

「あいよ。いつも、ありがとうな」

適当に返した返事だった。が遊にはそう受けとらなかつたらしい

「べつ…別にいいわよそんなの。そ…そもそも私がつくつたんじゃなくてお母さんがつくつたものだし……ありがとうならお母さんにいって！」

なにか不自然な遊の挙動。

「なに焦ってんだよ…？」

「あつあ…焦ってなんかいいわよ…。ただ。太郎がありがとうなんて珍しいから……」

遊はどうやら普通にもどつたらしい。

「…そうだっけ？いつも感謝してるぜ、お前んちにはな。」

小鳥遊家にはかなりお世話になっているのだ。ホントに感謝している。

「じゃあね」

遊が部屋入ったあとも、しばらく僕は廊下にいた。

小さい頃からここで育ってきた僕には、余り意識しなかったが。周りをよく見てみるとこのマンション。『普通』に入居したら、かなりのお金がかかる物件だろうと思った。

寒さも感じられ、ドアを開けて僕も部屋に入ってしまった

そこで

もう一つある人生最大の悩みにぶちあたる。

「ただいま」

返事は無い。

一人暮しだから返って来るわけない？

いや、僕は一人暮しではない。

玄関から真つ直ぐ廊下を進んで左をむく。すると二つの部屋のドアがある。

左側、つまり玄関側のドアには

《ユウハの部屋》

という札が垂れ下がっている。サッカーボールが描かれており、男の子の部屋なんだな とすぐにわかるようになってる。

左隣の部屋は

《ゆあのへや》

とかわいらしく、ウサギさんなんかといっしょにかかれた札が垂れ下がっている。

「おーい。生きてるか？」

ふざけ調子で言ってみた。が部屋からは生き物がいる気配がない。

「…………お兄ちゃん…………？…………お帰りなさい…………」

《ゆあのへや》

からはか細い、妖精のような声が聞こえた

しかし

《ユウハの部屋》からは何も聞こえない

よく耳をすますと

カタカタカタカタと機械的な音が聞こえる

この二人は僕の妹と弟だ。二人は二卵性双生児なのだが、性格は…
…うーん。似てなくはないか…。

今日は早帰りで、下手をすれば小学生より早く帰れたんだが。

二人はココにいた。

別に熱があるわけでも、学校がインフルエンザで休校してるわけでもない。
つまり

僕の悩みはそこなのだ。

二人はこのまま行けば二ト確定の『引きこもり』なのだ。

溜め息をつきながら廊下を抜けリビングのソファの電源をいれ、カーテンをしめる。

8階となると眺めはいい。

といっても、都会というより田舎なこの普原町の夜は真っ暗。

普原町の隣、芝川を挟んで向こうにはでかいビルが建ち並んでいて、ほのかに夜景が綺麗ではあるが。

いつもは帰ってくる夕方、面白いテレビをやっているのだが。

今日はまだ3時にもならない。テレビを回してもなんだかアンテナ
ークな番組ばかりだ。

いつもなら、こんな気は起きないが。

返事の無いユウハの部屋がすごい気になる。

というより

普通の人は普通に学校に行ってこんなメランコリイな気分になつて
も、宿題だなんだ って立派に苦しむのに…

妹と弟は…そういう苦しみをショートカットしてるようで、なんだ
か 悔しかったのだ。

「今日こそは言ってやる。いや言うだけじゃたらない、明日から…
学校に行かせよう。」

2章・双子症候群

太郎は文句を行ってやろうと思いつながらコタツで寝てしまった。

時計を見るまでもなく…周りは真っ暗だ。

眠い目擦りながらケイタイをとりだし、時計を確認した。

「……7時…か…」

ふと、お腹が寂しい感覚がした

「ご飯できてるかな…」

暑くなったコタツの電源を落とし、廊下に目をやると
ちやわんと小皿が2セット ちよこんとおいてある。

「……自分勝手な引きこもりさんだな……。」

そのちやわん達は

昨日のご飯に使われたものだ。

それが出されているってことは

『ごはんよこせ』のサインだ。

「…動かないくせに、食べるのかよ…まったく………」

そんな食生活でも、二人はけして太らない。むしろ痩せている。

遊は食事を取りすぎると

『体重増えたアア』

って落ち込むのに。

熱の冷めたコタツから出て、外界の寒気に体を震わせながら、ちやわんをひろった。

もちろんこの食べ終わって一日放置しておいた食器に、食事はよそらない。

ローテーションで使い回してるのだ。

僕は部屋をでて、隣の遊の部屋のさらにそのまた隣の、小鳥遊のお母さんの家に向かう。

まあ、遊のお母さん…とかそんなよそよそしい関係ではない。

小鳥遊 遊の母、小鳥遊 美空は僕らの育て親なのだ。

実の母、実の息子のような関係なのだから。

ドアを開けると、いいにおいが香る。

揚げ物の香ばしい匂い。

「太郎〜お皿あらつといて〜」

美空おばさんは揚げ物片手間で僕にニートたちの食器を洗えという。まあ いつものことだが。

「ほいほい。…あれおばさん。遊は??」
食卓のほうでいつも飯を待ち構えている遊の姿が見当たらない。

「部屋でシャワー浴びてるよ。太郎も一緒に入ってくればあゝ」
ニヤニヤと笑いながらこちらを見る。

「実の娘を僕に襲わせる気がよ…」

「何の話を…してるのよ…!」
湯上がりのブロンドの髪は何時にもまして妖艶だが…顔つきが怖い。

「いいじゃないの。小学生高学年まで一緒にお風呂に入ってた仲間じゃない」
爆弾発言してくれたババアは
まあババアというには若すぎる。

今年30歳の彼女は元グラビアアイドルだけあって、スタイルは抜群だ。

「はあああ!?! なっ…なにいつてんのよお母さん!?!」

「大体あれはあんたがっ!」

流石に僕も、遊も慌ててしまう。

まったくやめてほしい。年頃の若い男と女のまえでそういうことを話すのは。

「さあさあ。ご飯にしましょー!」

茶髪でポニーテールなのが若く見せているのだろう。

実年齢より5歳は若くみえる。

部屋はかなり広く、三人じゃ空間的にも少し寂しい。

しかし賑やかな親子と一緒に食事をする、空間的な寂しさは全く感じられなかった。

「ごちそうさま」

ご飯も食べ終わり、先程からおばさんに言おうとしてたことを切り出す時がきた。

「なあ、おばさん。やっぱりあいつら学校に行かせたほうがいいんじゃないか!？」

こんなこと、普通なら『そうだね』で返すのが当たり前だろう。しかし、そうはならない。

「いいじゃない。学校に行きたいって言うてるわけじゃないんですよ?なら、無理に行かせることないわよ。」

おばさんの答はおかしい。

しかし、僕らを養ってくれているのは、小鳥遊家の母 美空だ。

以前は美空には旦那がいた。

外国人で良いところのお坊ちゃまだったらしい。

その旦那が子を孕ませるだけしておいて、金を残してどっかに消えてからは、美空が身を削ってお金を稼いで家族を養ってきた。

そんなおばさんが行かなくていい。といってしまつと、変に僕は口出しがでなかつた。

「小学生から引きこもりじゃ…この先大変だよ？お母さん」

遊もおかしいと思ってくれたみたいだ。だが

「小学生だつたらまだいいじゃない。第一、あの子達が学校に行つて嫌な思いをしたらどうするの？？」

「な……なに勝手にあいつらを値踏みしてんだよ！あいつらは嫌な思いをしたくらいで心が折れるような弱い人間じゃない！」

馬鹿にされた気がした。そんなことから守らないとダメな弱い子だ。そういう風に聞こえた。

あんな引きこもりの妹や弟でも、やっぱり僕の妹なんだな、僕の弟なんだな。

あいつらを馬鹿にされてつい カツとなつてしまった。

行間・『普通じゃない』事件

午後8時を回っていた。

深夜でも無いのに普原町は真っ暗だった。

商店街のむこう。

住宅街。ちようど太郎達のマンションがある地域のとある路地。

その路地をあるっている男がいた。

男は先週彼女とも別れ、職の安定しない生活を送っていた。

「こんな時は、ビールでもものまねえと…やってらんないよなあ。」

人気の無い路地だからといって、愚痴が漏れてしまっていた。

最近新しく始めたバイト先の先輩について愚痴。うざい面接官について愚痴。

大半は別れた彼女に対しての愚痴だった。

まだ酒も入っていないのに、もう酔っているようだ。

トボトボと歩くと、目の前に人影が見えた。

他人がいることを意識し姿勢を正した。

勿論お口にチャックもした。

酔いが醒めたようだった。

(やっべえ…聞かれたかな…恥ずかしッ…まあそんなにポリウムでかく無かつたし？あの距離なら聞こえてないよな…？)

そんなことを考えながら男は再度、むこうからくる人影の大きさを確認した。

この路地は電灯と電灯の間隔が広く、余り前がよく見えない。だが、対向者との間隔が近づくにつれ、明瞭になってくる。

(…酔っ払いか…)
人影の正体は

フラフラと千鳥足で歩いてくるコートを着た中年くらい男だった。背は猫背っぽいのでたしかじゃないが、170は軽くある。

(酔っ払いなら…全然大丈夫だな…)

実はまだ愚痴が聞こえたんじゃないかと気になっていた男は、ここに来てやっと安心した。

『ピロロロロン』

メールだ。

ポケットの中にはいつていた。ケータイを取り出し内容を確認した。

《「くんばんわ」》

登録されていないアドレスからだった

(なんだこれ……???)

迷惑メールか間違いメールだろう。男は何かからかわれた気分になり、無愛想にケータイを閉じた。

「くんばんわ」

誰かが耳元で囁いた。

「……っひッ……!!」

その声の持ち主が、先程まで50mほど離れた先にいた、あの人影のものだと即座に理解した。

帽子を深く被り、白いスケキヨのようなマスクをつけた。コートの
大男の手には包丁があった。

「うわああッ！！助けッ！！誰かッだれかアア！！」

元々人気の少ない路地だ。助けは来るはずがない。

「さようなら」

その言葉とともに。

悲鳴は終わり、子供のような笑い声が始まった。

2章・電波症候群

結局おばさんは説得できず、あいつらを外に放ってやることもできなかった。

好き勝手やってるあいつらに何か、負けたような悔しさと、あいつらが外にでる為に何もできなかったことに対しての申し訳なさが渦を巻く。

ドアを開けてみると妹の友愛がいた。
トイレに行った帰りなのだろう。

部屋からすることも珍しい友愛にジャストタイミングで会えたことに、四つ葉クローバーを見つけた時にも似た高揚感が、劣等感やら自責の念やらを払拭してくれた。

小学5年生にしては幼すぎるような顔つきと体つきだ。
いつもくらい部屋の中でベッドに座り込んでパソコンやらテレビを見ている姿ばかりを見ていたものだから、久しぶりに全身を良く見ることが出来た気がした。

「…? ご飯まだ?」

首を傾げると、日本人形のような長い黒髪がサラサラと流れる。
日がな一日部屋に籠る妹の肌は透けるように白かった。

「ああ…遅くなっちゃったな…悪い」

遊と話すよりも、身内なのに余り会話もしなければ、顔もあわせない妹と話すほうが、なにか話じづらい。

そう言つて、玄関のドアを開けるためにお盆ごと床に置いた二人の食事を持ち上げた

「……………ううん…ありがとう…」

引きこもりとはいっても、他人に心を閉ざしてるわけじゃない。お腹がすいて、おいしそうな物を見て笑顔になれるんだ。

「どうしたの？ねえちゃん？」

友覇が部屋のドアから顔を出した。

友覇は友愛の双子の弟だ。顔つきも似通っているが、やっぱり男の子の顔だ。

友愛もそうだが、小学5年生にしては、幼いような顔つきで肌も透けるように白い。髪は余り手入れをしないから男の子にしては長い黒髪。

「…なんでもないよ……………ゆー……………ご飯きたよ」

「なんだよ！待ちくたびれたよ兄ちゃん！遅いつての！」

こちらを見ると良くわかるが、やはり顔の形は友愛そっくりだ。その睨みつける目つきをやめさせ、髪の毛をとかしてあげれば可愛いらしい女の子にしか見えないだろう。

その目つきを直せばな。

「だまつて感謝し…」

「で！ねえちゃん。これこれ…このサイト！」

人の話を無視して話題を変えやがった。

人生の色んなモンをショートカットしてるくせに、反抗期はちゃんとやるんだな…」。

「どれ？」

友愛が友覇につれられた《ユウハの部屋》に入る。

「…！」

この光景はずっと暮らしてきたが、こんなことは一度もなかった。

「おまえら…互いの部屋行き来したり、してたのか？」

《ユウハの部屋》の奥にある四台パソコンの内の一つに夢中で食らっていた友覇は忌ま忌ましそうに言った。

「そつだよ…」

「へえ…兄ちゃん、知らなかったな」

ちよつと嬉しいかった。ずっとお互い一人で引き込もってたと思っていたから。

こつやつて見ると、普通の姉弟だな。

しみじみと珍しくドアを開けたままのユウハの部屋に入って二人の
見ているものを覗こつとした

「兄ちゃん！気をつけて入ってよ！！」

友覇が怒鳴る。

「…わかるかった…」

悔しいが、ここで言い返すとパソコンの画面を見せて貰えそうになるので謝った。

「兄ちゃん、そのヤツさわらないでよ？」

「わかってるよ…」

そのヤツとは
アニメキャラクターねフィギュアの軍団のことだ。

そう友覇は引きこもりにして、アニメ、ゲームに関してのオタクなのだ。

しかし、イケメンのオタクというのはまったくオタクらしくない。

「ほんと…！私の予言どおり…：…すごい！！」
大きな瞳をキラキラ輝かせて、パソコンの画面を見ながら嬉しそうに言う。

ちなみに言うておぐが、コイツは引きこもりであり電波娘だ。

予言だの宇宙だの魔法だの　そういう言葉をかけると、話にならなくなってしまう。

今回はもう…電波に目覚めてしまったらしい。

「こんなこと、してる暇は無いわ……」

そういうと床にあるフィギュアケースを円状に並べた

「ねえお兄ちゃん！トイレトペーパーない？トイレトペーパーを賢者の石“エリクシル”に見立てて術式を組み上げるの早くしないと宇宙との交信が出来ないわ！トイレトペーパーでなくともいいの、似た形状なら形と意味が同じものなら、使うのはその二つだから。形つてのはね…」

「わかった！わかった！トイレトペーパーあるからっ！」

このままだと
延々と喋り続けるだろうと思いさっさとトイレトペーパーを持ってきてやった。

「魔法陣とか賢者の石とか宇宙とか、なんなんだよ、錬金術と魔法と宇宙をごっちゃにするなよ」

友覇はそれについては常識のあるオタクだった。

「いいえ、違うの。魔術も錬金術も全部同じもの、宇宙をそれぞれ
の形で表現してるだけで、本質は似通ってるのよ…。宇宙ですら…」

また…語り始めた。こうなるといつもは口数の少ない友愛はリミッターが外れたように喋りだす。

「おい！いいのか？魔法つかって宇宙と交信しなくて」「この妹をこんな風になだめられる僕は、普通ではないだろう。」

「そうだった！ありがとうお兄ちゃんっ！」

そう言うと、これまでに見たこと無いような機敏な動きで隣の自室へと向かう。

パジャマがはだけて肌が所々露出していたが、今の彼女には何を言っても無駄だろう。

「リアルと二次元の分別がつかないなんて…」「友愛は呆れたように呟いた。

「知らなかったのか？友愛が電波だったこと。」

パソコンの画面に視線を戻し友愛は答えた。

「知ってたさ。けどね何度みても、あの状態のねえちゃんは理解できないんだよ。」

確かに、理解できないな…

そう僕は心で呟いた。

2章・怪人症候群

「…それで？なにを見てたんだよ。」
「漸く落ち着いて、聞ける時がきた。」

あの孤立無縁に思えた二人が、一緒になって夢中で見ていたモノ。それが何か兄貴として知りたかった。

「これだよ」

そう言つとパソコンの画面を指さした

え？え？なに？そんなに簡単に見させてくれたの？
とさつきまで若干下手にでてた自分を悔やみながら、パソコンの画面を覗いた。

《現代に現れた切り裂きジャックの末裔》
覗き込んだらそんな記事がネット掲示板に書かれていた。

『切り裂きジャック』というモノを知っているだろうか？

僕も良く知らない、2000年くらい？前のロンドンかどこかに現れた伝説の殺人鬼って風に理解していた。

「それね…ねえちゃんが予言した通りなんだ。」
「おいしそつにご飯を食べながら友覇はいった。」

「はア？なに？なにを予言したって？」

「だから、『もしも切り裂きジャックの子孫が現代にいたら、先祖の意思を継いで猟奇殺人事件を起こすんじゃないか』って一昨日ねえちゃんが言ったら…本当にそういう都市伝説があつてさ。」

それは予言とは違くないか？

と思ひながらも

一番の疑問だけをぶつけた。

「でも…都市伝説なんだろう？なら探せばいくらでも……」
「実際に被害者が出たんだよ。」

一瞬、冷たい物が背中を這つたような気がした。

「ね！？凄いでしょ！実はね、僕も一昨日ねえちゃんの話きいてて、有り得なく無い話だなんて思つて……聞いている？」

嫌な予感しかない。

何故？ 毎日のように殺人事件が報道されて…
それは皆、僕らと関係ないものじゃないか…

「それにね、その事件…」

秘密兵器を見せびらかそうとする、僕の驚く顔を見るのを待ち構えているような笑顔で 友覇は話続ける。

「ついさっき、並原町で起きたらしいよ？」

全身の毛が逆立つ。という言葉を実験した。

震える手で、パソコンの画面をスクロールしてみる。

《24日午後8時半頃、普原商店街の路上で男性の遺体の上半身が、普原町の住宅街に下半身が、それぞれ発見された。それぞれ右手、右足に“JackTheRipper”と刻まれており……》
更に下へスクロールすると、野次馬か何かが撮った現場の写真が上
がっていた。

「8時…30？」

時計を見ると、時計は11時を指そうとしていた。

つまり、つい…1時間半前……この近くに“切り裂きジャック”が
いた。

その事実にも、言いようのない恐怖に教われる。

それでも、弟の前で情けない態度は隠さなければならぬという意
識が働いた。

「……どうせ…愉快犯だよ。大方、こういう都市伝説を見て……」

“切り裂きジャック”じゃなくても、殺人鬼は消えないのに。

ただ何故か

“切り裂きジャック”を恐れていた自分がいた。

都市伝説に出てくる得体の知れない怪人がやっつてるわけじゃないと

…信じたかったのだろうか

「なんで！？偽物だつて証拠ないじゃん！？」

「…ジャックは女を襲うんだ。だから男が被害者である時点で……」
被害者が女に限られる、ジャックの方が僕には危険が及ばずにすむから良いはずなのに…

ジャックではないという根拠を探している自分がいる。

「へえ。そうなんだ…でも、それって今まで襲われたのが女の人っただけじゃないの？それに犯人がジャックの子孫なら、男を襲ったって別におかしくないよ」

確かにそうだった。

「それに、僕らは、ジャックの魂が取り付いた人間が事件を起こしてるんじゃないかって予想してるんだ。」

「…そんな訳……」

しかし、そういいながらジャックを肯定しようとする友覇の目は…
無邪気そのものだ。そんな目を見てみると、何故か二人を守らなきゃ…という気持ちが沸き上がる。

別に、二人が狙われるわけじゃないし、狙われことになるとも思わない。

友覇の部屋から出た。すると不思議と『切り裂きジャック』への恐怖は凪いでいた。

それからなにをすることもなく。

ただカーテンを閉めて、布団を敷いて眠りについた。

今日はホントよく弟たちと喋ったな

友愛の部屋からはまだ、カッコイイような呪文が聞こえていた。

2章・夢想症候群

夢の中で父親にであった。
顔も見なかったことのないのにな。

というのも僕は物心ついた時にはすでにこのマンションにいて、その時から既に美空おばさんに世話になっていた。

まあ幼稚園の年長まで美空おばさんはお母さんだと思ってたし、そう呼んでいた。遊のことも兄妹だと思っていた。

僕の実の父親は『賭博暴王』の異名を持つギャンブラーで、実の母親も『勝利の女神』の異名をもつギャンブラーだそうた。

実際、どれだけ儲かっているのかも知らない。

今は…というよりずっと彼らはアメリカのラスベガスで、日本に帰って来たことは、僕が生まれて以来一回もない。

何故、美空さんが育て親になってくれたのか。

その疑問は小学生高学年になってから教えてもらった。

おばさんは僕の父と母の知り合いで、そのため子育てを押し付けられてしまったらしい。

ただでさえ、同い年の娘を育てなきゃならないのに。

しかし、おばさんには前の旦那から貰った結構な金があるから引き受けたのだろう。

生まれてすぐに僕を引き取ったそう。

ちなみに、その時にはもう遊ば生まれていた。

そしておばさんは元旦那の金でマンションを買い取って、管理人として収入を得ていたのだ。

そしてある日、僕が年長の冬に

「おばさん。僕、妹と弟がほしいよお」

そんな風についておばさんを困らせていたら

その年の12月の24日に

双子の赤ん坊と、その名前が記されたストラップがプレゼントされたのだ。

勿論、送り主は

僕の実の両親だが。

僕は太郎なのに

妹弟は友愛だの友覇だのと、手がかなりこんでいた。

これには流石に僕も悪意をかんじた。

それからというものの、毎月二人宛てにプレゼントが贈られてくるようになった。

今、妹や弟たちの部屋にある
合計16台のパソコンと合計2台のテレビも全て、両親からのプレゼントだ。

言うておくが、僕はプレゼントをもらったことは無い。
クリスマスだろうが誕生日も等しくプレゼントなど貰ったこと無かった。

妹も弟も、小学校2年までは普通に学校に通っていたのだが、3年の春から引きこもりになってしまったのだ。

夢の中で父親らしき人は僕にこう言った。

「兄ちゃんっていつてもまだお前は子供だ。妹と弟を守れなくても荷が重いだろう。守れとは言わん。だから側にいて、あいつらの一番の理解者になってやってくれ」

朝起きると

時間は8時40分。

「ん?…げっ!…!遅刻ッ…!」

と飛び上がるが、普通に間に合わない。

そう思い

余裕をもちながら用意をした。

いざ、行こうとドアを開けると

ゴンッ

「いったあああ!…!」

瀧澤のアホがいた。

瀧澤の話によると昨日の猟奇殺人事件で犯人はまだここらへんにいるかもってことで、今日は休校になった という訳だ。

心の中で『瀧澤のアホがいた』

とか言っていた僕は、休校だったこともしらず遅刻するって焦って、揚句の果てには内心ヤバイヤバイとかいいながら余裕を装い支度をしていた自分に羞恥する。

とりあえず、そこら辺の茶菓子を出した。

「お〜さぶい、さぶい。」

ウィンドブレーカの下にサッカー部のユニフォームを着ているところを見ると

コイツも休校だとしらなかつたらしい。

学校に行って気づいたのだろう。

仲間がいて、ちょっとホツとしながら、布団を片付けていると

「なんで起こしてくれないのよお！……太郎のバカバカばかり！」
という叫びが隣の部屋から聞こえる。

半分泣きべそをかいている

ドタドタと部屋を行ったり着たりしている。 用意しているのだろ
う。

「あ！お仲間三人目はつけくんww」
とコタツと一体化しながら瀧澤はお菓子を貪っている。

僕が玄関から顔を出して、遊の部屋のドアから遊が出てくるのを待
ち伏せした。

しばらくドタドタと音がしたあと
ドアが開いた。

「おはよーさん」

ニヤニヤと遊のマヌケ面を眺める

「……っつわあっ！???え!?なんで!?太郎!?!」

パジャマに冬服の制服を上に着ていたが、胸の辺りは開けていて、
口にはパンをくわえていたのだが落としてしまった。

「随分とオシヤレだね〜」

「ふえっ!?!」

良く目を凝らしてみると、自分が物凄い格好をしていることに気づいて絶叫した。

「お邪魔します〜す」

ちゃんと着替えた遊は、せっかくなので遊びにきた。

「チーツス!朝っぱらからいいコメディーだったな!」

我が物顔で、コタツに居座る瀧澤はケラケラ笑っている。

「な…ッ!?!」

(瀧澤がいたの……?…はあ久しぶりに太郎が呼んでくれたと思ったのに…)

ちよつと残念そうな顔した遊を、ニヤニヤ見つめる瀧澤。

「三人とも、臨時休校の知らせメールに気付かないなんて、逆にす

「げーよな」

僕は追加分の湯のみを用意しながら行った。

「違うのよ！私は一回気づいて二度寝して、忘れてただけっ！！」
必死に弁解する遊。

「結局、覚えてないんじゃないじゃおんなじですー」
と湯のみもセットし終わったので、コタツに足を入れる

「むっ……う……」

遊は渋々コタツに座ってお茶を啜る。

「にしても、あの慌てっぷり凄かったなあ」

笑う瀧澤の前で遊は羞恥でどんどん赤くなってゆく。

「その慌てっぷりじゃ……パンツとかも履きわすれてんじゃないか？
あははは」

ちよつとふざけて言ってみただが。

「はっ……はいてるわよ！！！！ヘンタイッ！大体、さっき着替えて来たんだから、もうテンパっ……て……あれっ？……うっ……うそ……！？」

立ち上がって遊は固まった。

「えっ…まじ？」

ふざけ半分で聞いたのに、有り得ない反応がきたから、思わず聞き返してしまった。

スカートを押さえながら　ふるふる　震えている。

「うわあああん！！何も言つなああああ！！！」

その悲鳴が引き金になったかのように
友覇の部屋のドアが開いた。

「今朝は、随分賑やかだね。」

珍しいものを見るように
瀧澤と遊はキョトンと、友覇を見つめた。

2章・猟奇症候群

「トイレに起きたただだから、気にしないで」
そういうと眠そうな目を擦りながら、トイレに向かう

「私…久しぶりに見たよ1年ぶりくらいかな…？」
パンツをはいていないことさえも忘れてしまうほどの衝撃だったの
だろう。

「…あれがお前の弟か…はじめてみたぞ……」
瀧澤に至っては初見だということだ。

そんなことを言ってる内に
トイレを流す音が聞こえた。

トイレからでて廊下を少し歩いて自分の部屋に向かう友覇に、瀧澤
と遊の興味津々な視線が向けられる。

気分は余りよくないだろう。

トボトボと部屋に入る。

入ろうとして友覇は立ち止まり、僕に向けて言った

「昨日の切り裂きジャックの事件、一夜でかなり進展してるよ。」

「!?!」

けして忘れていた訳ではない。朝から遊や瀧澤が押しかけて、もしかしたら『切り裂きジャック』の犯人はもう捕まったんじゃないか。警察が動いてくれるさ。と、意識の外に追いやっていたのだ。

ドアを開けっぱなしにして友覇は部屋に入っていた。

それは…入ってこいって ことらしい。

「切り裂きジャック？昨日の猟奇殺人事件のこと？」

遊が不思議がるのは普通だろう。

切り裂きジャックなんていう大昔の伝説。

「切り裂きジャックってなに？ねえ！？なにそれ！？……トランプ…？」

瀧澤。お前は知らなくても不思議じゃないな。馬鹿だから。

入ると、窓の無いため朝から電気をついた部屋には何か物凄く体に悪い電磁波が飛び交ってるような気がした。

まあ、今日は曇天なので、リビングのほうも電気は付けていたが。

「そこ座っていいよ。」

「お…おう。」

床に勢揃いしてる美少女フィギュアと、床に積み上げられたエロゲ、ギャルゲの数々に体が触れないように慎重に座った。

「…………お……おじやま……しまーす…………」

恐る恐る入ってきた遊は、まず。床、棚、机に勢揃いしている美少女たちを見つけて驚いていた。

「おほー！……これあれだろ！？『け おん』の唯だろ！？うわー。かわいいなあ！山田弟も見てるの！？」

美少女たちに夢中の瀧澤は、フィギュアを取って スカートの中を覗きこんでる。

「触んなツ！……！！！」

「あ……はは。なんか……すみません……。」

激怒する小学生に瀧澤は気圧されてしまった。

悪いな瀧澤。でもお前も悪い。

「はあ。兄ちゃんこれ見て。」

そこには

《現代に蘇る『ジャック・ザ・リッパー』》
と書かれた記事があった。

都市伝説を集めているサイトの、『ジャック』についての記事らしい。

そこにはこう書かれていた。

《夜になると現れ、猫背の大男で、黒いコートをきて顔にはマスクを付けて帽子を深く被っている。

声は子供のように甲高い。

突然、未登録のアドレスから

『こんばんわ』と書かれたメールが来たら最期、
数時間後に必ずジャック・ザ・リッパーに殺される。》

そしてこの都市伝説はこう終わっていた。

《ジャック・ザ・リッパーは昼間は、人間として活動しているとい
う。

もしかしたら、貴方のすぐ側にジャック・ザ・リッパーがいるかも
しれない。》

と。

「今回の事件：上半身と下半身を切断して自らの名を残すという手
口もこの話どおりなんだ。」

他の三つのパソコンを操作しながら友覇はいった。

「うそでしょ…？これって…都市伝説じゃん……」

遊は想像したより、事件が混沌としていたのだろう。怯えきって
いた。

あの馬鹿の瀧澤でさえ。

黙り込んだ。

「それに僕。ジャックを見たんだ……。これを見て」

なんで外に出ないコイツが……
と思う前に、パソコンの画面を指差した。

僕はパソコンの画面から、パソコンの画面へと視線を移す。

そのパソコンの画面は監視カメラの映像みたいなのが画面を9等分して、9つあった。

どれも自分のよく知る、普原町の映像だった。

「監視カメラの映像??こんなもんどつから??」

「全部、僕が設置した監視カメラだよ。お父さんのプレゼントのね」
外にでないお前がどうやってと思ったが。そんなことはまあ、どうでもよかった。

9等分の画面がそれぞれ動く、真夜中の映像なのに 動くものが綺麗に鮮明にみえる。赤外線かなんかのカメラなんだろうか?

「11111!!これこれ!!」

画面の中の映像の時計は午前2時を指していた。
酔っ払た女性の前に黒いコートをきた猫背の大男……。

さっきの話の条件を完璧に満たした大男が立っていた。

「……ひっ！」

画面の前で恐ろしさの余り悲鳴をあげたのは遊だった。

「……俺んちの道場の近くじゃないか……」

瀧澤の通う柔道の道場はどこにあるかは知らなかったが、それでも画面の中の風景は僕も見慣れたモノだった。

酔っ払った女性は、目の前の怪異に気づかずに、ケータイがなったのだろうかポケットからケータイを取り出した。

そして女性は目の前の怪異に気づいたようだ。

ケータイを落とし尻餅をつき、後退りする。

顔は恐怖に歪み、口を開け悲鳴を上げてるようだ。

だが悲鳴は聞こえない。

この映像には音声はなかった。

鉈のようなモノをもった大男が襲い掛かった。

「きゃあああああっ！！！」

聞こえたのは遊の悲鳴だった。

友覇は気をつかったらしく、大男が女性をバラバラにするだろうシーンは見せずに、襲い掛かる手前で映像を停止してくれた。

「あと……これも。」

友覇は落としたケータイの画面を拡大した。

そこにはこう書かれていた。

2章・不安症候群

友覇の話だと、この猟奇的事件は今朝からテレビでニュースが流れはじめているらしい。

一晩で新たに5人の被害者がでており、またそれぞれ手口は同じだという。

普原町という限られたエリアで、こんなに短い間隔で頻繁に殺人事件が起きてるというのに、警察は何をやってるんだ。

そもそも何故、この広い世界でこの町。普原町なんだ？
何故隣町に逃げないんだ？

奇妙な現象が重なり合い、不安を増してゆく。

「まあ…あれだ……警察がなんとかしてくれるさ。」
リビングにて、三人の空気は最悪だった。

警察がなんとかしてくれる。

そっぴいながら、僕は自身にそう言い聞かせていたのだ。

「そうだな！ゲームでもして気を紛らわそうぜ！」
こんな時こそ、コイツの真価が発揮される。まさに太陽なような男だ。

「そうよね。ビクビクしてたってはじまらないよね…。後は警察が何とかしてくれるよね…!」

「そうだ。どこの誰だか知らないが、都市伝説を再現してるに違いない。」

別に壁を摺り抜けて入ってくるようなモノってわけじゃないんだろ
うし、

このマンションにいるかぎり、素晴らしいセキュリティシステムに
守られてるんだから。絶対安心だ。

「そうだよ、このマンションのセキュリティシステムは完璧じゃないか。それにここは8階だけ？外にさえでなけりゃ、全然安心じゃない」

不安を払拭するために僕は言い切った。

その言葉を聞き。遊も瀧澤も一安心した風だった。

「まったく！感謝しないとイケないくらいだぜ！なんてったって、
出席日数とか気にせず堂々と学校休めるんだし。」

太陽はいつもの調子を取り戻したらしい。ちょっと馬鹿なくらいが
丁度いい。

「そうだ、事件が収束するまでウチに泊まらない!？」

ちょっと思い切りが良すぎたと思ったが…まあこんな時だしいいか

！と心の中で妥協した。

「いいじゃないか！俺、お菓子沢山かって来たし！！」

「うん！そうだね！じゃあ私、隣の部屋から泊まりの道具もってくるね！」

二人とも

完全に頭からあの事件が消えたわけじゃないと思う。

灌澤は忘れてるかもだが。

でも、怯えてるよりみんな楽しんでいたほうが不安は和らぐとみんな解っていたんだろう。

「わかった。ちゃんとパンツ履いてこいよ」

「え？……あつ！……！」

僕が言わなかったら忘れていたのだろうか

「うるさあああ！わかってるわよっ！……！」

2章・予言症候群

あれから僕らはテレビゲームなどをして過ごしていた。

午後6時くらいになると、昨日は夜更かしたのだろうか友愛が部屋から出て来た。

「…？お兄ちゃんのお友達…？」

とトボトボ歩いてきた。

「おじやましてまゝす」

と遊は友愛の方に目を向けた。

僕と瀧澤はテレビゲームに夢中で、画面に集中していたのだが…

「きゃー！ゆあちゃん！！服はっ！？」

遊のヒステリックな声で、振り返る。

すると…、

そこには全裸の女子小学生がたっていた。

不幸中の幸い長い黒髪が恥部や胸を隠してくれていた。

「っ！しまった…」

「ッ！！！！？」 瀧澤は驚きながらも、精一杯目に焼き付けようと目を見開いている。

「みてんじゃねーッて！！他人んちの妹の裸体をガン見してんなん！！」

僕は瀧澤の視界を阻む。

「べっ…べっに見てねーし！っーか見えちゃったんだって！！」
不可抗力だともいいたいのか、この野郎。

僕は必要以上に驚かなかつたのは……まあ、これもいつもってわけじゃないが。たまにあることだからだ。

真夏の熱い日、友愛よく全裸で生活をしている。

矯正しようとは努力したが、これはもう脱ぎクセがついてしまっていて、寝ながら無意識の内に全部。スッポンポンになってしまっただ。

今の所引きこもりだし、裸を見られても家族だからまあいいか、成長すれば恥ずかしくなって自らやめるだろうと思ったが、心も体も成長しない。

ただまあ、部屋から出るのも珍しい上に、冬場で滅多に脱ぎクセは発動しないというのに。

まったく。瀧澤はかなりラッキーだ。

「友愛！服きてこいつ！！」

「ふくう…？」

と言つて友愛は今の自分の状況を確認した。

「……あれ…？」

友愛は視覚的に状況を確認した上で、羞恥してない。

大丈夫か？人として…女として！

「布団でも良いから！早く！！」

「もお！お兄ちゃんさつきから怒りん坊…。」

「ゆあちゃん！これ着て！」遊が気を聞かせて自分の上着を羽織らせた。ありがとう遊！

友愛のやつは

いつもと違うリビングの様子に興味津々だ。

「どうしたんだ？まだご飯の時間じゃ無いだろ？」

廊下でリビングの様子を見ながら、立ち止まってる友愛。

「ちょっと…おしっし」

ならさっさと行って部屋にもどってる！！と言いたかった。

しかし、引きこもり相手に怒るのはタブーだ。
怒って、喧嘩になったり落ち込んだりしてみる…
引きこもりに拍車がかかる！

だから文句はすべて心の中で処理するのが僕の日課なのだ……。

「そ……そうか…じゃあ行っておいで……。」

さっき少し強い口調になってしまったお返しに、かなり優しい口調で言った。

「うんっ」

僕が優しい口調に戻って満足とばかりにいい笑顔だった。

昨晚、破竹の勢いでひたすら電波なことを語っていた電波娘は、元の大人しい、口数の少ない友愛に戻っていた。

トイレを済ませる音を聞きつつ、一段落したとばかりに僕は瀧澤の視界を妨害する行為を止めた。

水の流れる音と共にトイレから飛びだした友愛は

てっててって

と僕の元へと駆け寄る

勿論、裸に上着を羽織るだけの破廉恥な格好のまま。

しかし、それを叱ることが出来なかった。

友愛にこんなにも無邪気に抱き着かれたのは
引き込もって以来初めてだったのだ。

だんだん引き込もる前の友愛に近づいてきたような気さえした。

「ゆあ、昨日お兄ちゃんのお陰で交信できたの。」

昨日の話らしい。確かにあんなに急いでた友愛は見たことなかった。
友愛にとって大事なことだったんだろう。

と、まあ全く電波なことは信じてないが…。

「昨日の交信でね、新しい予言が出たの…。」

電波な話をしているのに、まだ友愛は電波化していない。

「お兄ちゃんに教えてあげるね」

「え…。あ、ありがとう」

友愛を抱っこしている形になり、友愛の体重を直に感じていた。またその体重が引き込もる前抱っこしてあげた時に感じた重みに比べてちゃんと重くなっていたことに感動していた僕は、友愛のその言葉に見合ったりアクションをとれなかった。

けれど、満足げに友愛は語ってくれた。

可愛らしい唇をこれまた、可愛らしく動かし耳元で予言囁いた。

しかしその内容は
僕にとつていいモノではなかった。

『切り裂きジャックは僕によって殺される。』

そういう内容の予言だった。

「え！？お兄ちゃんって、僕？」

「ゆあのお兄ちゃんはお兄ちゃんだけだよ！」

微妙に回答になってない気がするが、まあいいとしよう。

「頑張つてね！お兄ちゃん！私たち信じてる！」

朗らかに笑って

友愛は部屋に入ってしまった。

「予言って…なに??」

遊が神秘的な顔で尋ねる。

僕は、こう答えるしかなかった。

「ははは。友愛って…電波だから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675z/>

孤独症候群

2011年12月11日18時50分発行